

ベトナムホーチミン市の季節の中で日本の四季を学ぶ

前ホーチミン日本人学校 教諭

埼玉県鳩ヶ谷市立桜町小学校 教諭 石 黒 裕 也

キーワード：ベトナム（ホーチミン）、理科、生活科、四季、国際理解

1. 派遣を終え、今感じること

周囲の協力もあり、ベトナムホーチミン市での3年間の派遣を終え、再び埼玉県での勤務に戻った。この3年間は本当に貴重な体験であり、この3年間で出会ったすべての人々に対し、言葉では言い尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいである。社会主義国であるベトナムでの生活、人々のやさしさ、日本人学校でのたくさんの出会い、支えてくれた家族など、お伝えしたいことはたくさんあるのだが、ほんの数か月前のことを、思い出し、懐かしみながら、その経験を少しでもお伝えできればと思う。

2. ベトナムホーチミン市の季節の中で日本の四季を学ぶ

(1) 灼熱の入学式

4月、日本では桜が咲き、心地よい春の風が、すがすがしい春を感じさせ、日本人のDNAに刻まれた、「春、まさに、人生の節目」という気持ちを思い起こさせる。

一方、ホーチミン市は雨季と乾季の2つの季節があり、4月から5月に1年で最も暑い季節を迎える。派遣1年目、エアコンのない体育館で迎える入学式。3日前に日本から来越した私の顔は、玉のような汗が流れおち、背中にはじっとりと張り付くシャツの感触が気持ち悪い。学校生活へ夢を膨らませた1年生をつれてこれから入場するのにも関わらず、先頭を歩く担任が、汗まみれとは、なんと恰好が悪いと思いつつ、ハンカチで汗をぬぐう。

ふと、子どもたちに目を向けると…涼しい顔をした子どもたちが笑顔でこちらを見ていることに気づく。「もしかして、暑くないのか？こんなに暑いのに？」そう思いながら、早くこの気候に慣れなくてはと、思わざるを得なかった。

ちなみに、1年後に再び1年生の担任となった私は、涼しい顔で4月を迎えるのだが、人間、慣れとは恐ろしいものだ。さらに、校舎の増築に伴い、新たにエアコンの効いた集会室が設置され、以降全ての儀式的行事が集会室で行われるようになった。涼しく快適に入学式が行われることに、うれし反面、灼熱の入学式がなくなったことに寂しさも感じている。

(2) 生活科で四季を学ぶ？

学習に関しては、日本人学校も日本の公立学校も違いは、ほとんどなかった。私自身も使い慣れた教科書で、今までと同じように学習を進めていた。特に不自由することはないように思えた。ただ1つ生活科の学習を除いては…

生活科では、春を感じさせるイラストとともに、さまざまな植物の芽や活動を開始した虫たちの様子が描かれている。命の始まりを感じさせるまさに、春の学習である。

しかし、教室の窓から外を見ると、たちのぼる陽炎、灼熱の太陽、青々と育ちゆく木々がきらきらと眩しい。そこには、春のさわやかさは



あさがおの観察

なく、「春をみつけよう！」と子ども達には声をかけにくい。それでも、とりあえず、「春をさがしに行こう！」と声を出してみた。外での学習が大好きな子ども達は、大盛り上がりで元気いっぱい外に向かっていった。

声はかけたものの、前日に校庭をまわったところ、あまりめぼしい春がなかっただけに、ホーチミン生活の先輩である子ども達の潜在能力に賭けようという安易な考えであったが、ここで、子ども達の素晴らしさを再確認することとなった。「あの木の赤い花がさき始めているよ。」(5月から6月に満開を迎える火炎樹)「白いあさがおのつぼみを見つけた。」(アサガオの原種のような小さい花)「アリが歩いているよ。」(年中、いたるところに)「キノコを見つけた！」(春なのそれ?)「背中が黄色のカエルがいるよ。」(さわったらだめ! 毒がある!) などなど、それぞれが2つ3つと春(らしきもの)を見つけて、観察カードに書く姿を見て、「ここでも楽しく生活科の学習ができそうだな。」と、思う反面、「これでいいのか? 春を学んでいないのでは?」という疑問も生まれてきた。

そこで、生活科の学習を「日本のことを学ぶ(写真やビデオを使って)」と「日本の四季をホーチミンで置き換えると何がある?」の2つの柱で取り組むこととした。

(3) 日本のことをもっと知りたい

1年生といえば、毎日の成長を楽しみながら過ごすあさがおの学習が大切であるが、5月の初旬に種をまいた直後から、さすが南国という、あさがおの成長を子ども達と楽しむことができた。種まきから1週間で芽を出した双葉はそのまま急激な成長を遂げ、夏休み前の7月下旬には、なんと種ができ始めていた。さらに、休み明けには落ちた種から再び発芽し、またぐんぐん伸びていくのであった。

ベトナムという気候を考えると当然のことだが(米も3期作)、両親の仕事が終われば帰国し、日本の子ども達と同じように過ごしていく日本人学校の子子ども達には、日本のことをたくさん教えていこうと考えていたため、日本の勤務校に連絡を入れ、メールで定期的に写真と日本の子どもたちの観察カードを交換し合うことにした。教室にも、日本の様子と比較して掲示したが、子ども達は自分たちのあさがおの成長が早いことがうれしく、ホーチミンですごいねと、少し自慢げであった。

発展途上国での生活は、不便なことも多く、「日本に帰りたいな」「こんな国嫌い」と思っている児童も少なからずいる。そういった意味で、暑さが成長に起因し、日本よりも早く成長することは、子ども達にとってこの国を好きになる良い機会ともなった。

(4) 秋・そして冬へ

秋の学習は、木の実など(どんぐりや植物の種)をつかってものづくりをしたかったのだが、9月・10月になっても何も落ちていない。「日本の四季をホーチミンで置き換えると何がある?」が柱の1つであるため、とりあえず、秋さがしに出かけた。その後、「どんぐりはないね」と話し始め、「似ているものはないかな?」と、子ども達と考えた結果が「南国フルーツの種」だった。

フルーツが年中市場にあふれるベトナムでは、日本では味わえない様々なフルーツを子ども達も楽しんでいる。子ども達が、毎日学校に持ってくるお弁当(本校には給食設備はなし)には、いつも色とりどりのフルーツが入っており、フルーツの種はなじみ深いものである。そこで、子ども達から種を集め始めたのだが、なんとたくさんの種が集まってきた。これで準備完了となり、「秋祭り」と題して、ものづくりを楽しんだ。種をころがす、すべり台競争やストローで種を飛ばす射的、種ゴルフなど工夫を凝らした作品が出来上がった。

そして冬、いくらなんでも南国で冬を体験することは無理だということになったが、冬を体験したことがない児



集まった様々な種

童もいたため、どんな冬を体験したいかを聞くことにした。そこで出たのが「雪合戦」と「雪だるまづくり」だったのだが、とりあえず気分を味わおうということで、綿をまるめ、雪だまをつくり、段ボールに綿をはり雪だるまをつくった。それを持って外に出て、校庭で雪合戦をしたのだが、その時の笑顔は今でも忘れられないものとなった。日本の四季を感じることは非常に難しいが、ホーチミンだったら何ができるのか？どんな経験をさせてあげたいのか？を考えることは、難しい中でも、楽しい時間であった。特に、子ども達から「こんなことをしたい。」と声が出たことはこの土地で生活する子ども達にとって良い経験になったのではないかと考える。

(5) 学習のまとめから感じた子ども達の国際理解

赴任1年目、2年目と続けて小学部1年生を担当したが、1年目には校内の研究授業の共生をテーマに、「あさがおのものがたり」として、観察記録にもとづいて劇化した発表会を行った。観察記録で記述した言葉を用いて、1年生自身がシナリオを作ったのだが、日本の様子とホーチミンの様子を成長の違いを意識して、それぞれを比較するなど、ベトナムの良さ、そして日本の様子を生活科の学習を通して学ぶことができた。

2年目には、生活科・総合的な学習の時間の発表会である「ホーチミン祭り」において、あさがおの成長とベトナムの風土を合わせた劇を上演した。育てていたあさがおが、ぐんぐん天までのびていったのだが、雨期の雷雨でたおれそうになる様子を見て、雷様に雷雨を弱めてもらいに行きたいという創作劇であった。あさがおの成長とホーチミンの気候を相互に取り入れることで、子ども達自身にも身近な題材となり、お話づくり、台詞づくりから主体的に取り組むことができた。

「日本のことを学ぶ」「日本の四季をホーチミンで置き換えると何がある？」は軽い気持ちで始めた生活科においての四季の学習であったが、終わってみれば国際理解の観点からも日本とベトナムを比較し、そこからさまざまなことを学び取れる学習となった。

教材研究という授業前という印象が強いが、子ども達と共に考え、作り上げたこの学習は、3年間の派遣生活の中でも、自分自身にとっての大きな財産となった。「向こうには何もないから日本のものはどんどん持ってきて」という話や「日本と同じようにはいかない」と派遣前に聞かされていたこともあった。しかし、「楽しみながら、そこで何ができるか」という考え方は、われわれ教員にとって非常に大切で、忘れてはいけない考え方であると思う。そういったことを再確認できた意味でも、日本を離れて生活することで、目先を大きく変えることができた。

(6) 暑さの中でたくましく

首都であるハノイ市は四季があり、桜も咲くが、ベトナムホーチミン市は大きく、雨季と乾季の2つの季節に分かれている。年間の平均気温は30度を超え、雨季は決まった時間（午後3時ごろから1時間ぐらい）にスコールが来る。4月・5月は明け方から気温が上がり、9時ごろには40度近くに達する。

3年間の生活で、暑さにも大分慣れたが、暑い時期に、帽子をかぶらず直射日光の下にいと、5分ほどで頭がくらくらしてくる。

ホーチミン日本人学校の子も達といっしょに、我々もその暑さのなかで、毎週2回、朝運動として校庭を走る。体力低下が話題に上がることも多い中、「今日は朝運動だ！」と元気に外に出る子ども達には頭が下がる思いである。

生活環境や遊び場の問題などで、子ども達は放課後、自由に外で遊びまわることにはできない。しかし、40度を超える暑さの中で、休み時間にサッカーをしたり、鬼ごっこをしたり、縄跳びをしたりと、非常に子ども達はタフであった。

4月に日本から来たばかりの子どもが、体育の授業時間に、暑さのあまり顔を青くし、保健室で休んでいることなども多くあるが、1学期が終わるころには、暑さになれ、水分の取り方も上手になり平気な顔で授業を受けている姿を見て、「たくましく成長しているな」と何度も思ったものである。

3. さいごに

この国に限らず、海外で暮らす日本人の中には、発展途上国でなくとも、その国での生活に対して不満を持っている者も少なくない。もちろん便利な日本と比べてはいけないのであるが、私個人としても、せめて子どもたちだけは、この国（ベトナム）を好きになってもらいたいと考えて過ごしてきた。そして、日本に帰国した際に、胸を張って「ベトナムのホーチミン日本人学校からきました。」といえるようになって欲しいという思いを持って3年間子ども達と向き合ってきた。

実際、子ども達がどのように感じ、ベトナムで過ごし日本に帰国していったかはわからないが、私自身、大好きなベトナムを少しは伝えられたかな？ と今、考えている。

余談になるが、派遣中に生まれたわが子にベトナム（越南）の越をとり、越士と名付けた。わが子を呼ぶたびに、この3年間の経験を思い出していきたい。それぐらいこの国が好きになった！

Xin Cam On！（シンカムオン）＝ベトナム語でありがとう！！